読売 俳壇

矢島 渚男 選

冬帽子に揺れるポンポンポストまで
姫路市　フランシオサ

【評】何か期待することか、嬉しいことがあって郵便を出しに行く。てっぺんにポンポン―毛糸の玉―を付けた帽子を被って…読む方もなんだか嬉しくなるリズムだ。

もったいない紙に包んで豆を撒く
千葉市　高　久

【評】子供の頃はそんなことなど思いもせず、親について豆撒きをしていたが、こんな追儺風景が普及してきたようだ。無駄だ、不衛生だ、拾うのが面倒だ、とか言って。

這い這いの子に迎えられ年始僧
鳥取県　垰田小夜子

【評】這い始めの好奇心旺盛な赤ん坊。玄関の戸が開くとお坊さんだった。見たことがない人にびっくり。

雪になる気配母屋はまだ起きず
深谷市　酒井　清次

「耳になれ俺は目になる」冬麗ら
北九州市　小住　貞子

馬は尾を一振りもせず牧に雪
横浜市　奥沢　和子

トラクター洗ふしぶきや春立ちぬ
川越市　大野宥之介

北風が揺らす葉の影楽しめり
小美玉市　網代奈津江

炬燵で寝炬燵で食べる良き日かな
東京都　山田真理子

バッカスは友なり師なり牧水忌
四街道市　須崎　輝男

高野ムツオ 選

戦没後八十年目の余寒かな
川口市　高橋まさお

【評】戦没者と呼ばれる犠牲者が途絶えてから八十年目ということだろう。平和が保たれている日本だが、安心ばかりしてはいられない。その危機感が「余寒」にこもる。

流れ果て息止めたかに氷瀑す
千葉市　宇野嘉世子

【評】山陰の小さな凍滝。岩の間を縷々と流れきては氷り付いた。最後の力を尽くし、やがて命が絶えた水の精のような美しさが想像できる。

グランドをゑぐりてラガーぶつかりぬ
仙台市　佐藤　庄陸

【評】ラガーたちがスクラムを組んで押し合う場面だろう。一進一退の攻防を支える足先を描いたことで、必死の形相までも見えてくる。

鶚飛ぶ身よりも重き魚摑み
町田市　枝沢　聖文

悩みごとなどなささうな日向ぼこ
香川県　福家　市子

寒がりの人の隣りも寒がり屋
守口市　小杉なんぎん

動き出す機関車氷柱つけし儘
横浜市　我妻　幸男

大寒の鉄路軋ませ始発かな
北上市　佐々木清志

日本の冬まだ温し抑留記
前橋市　平林　始

武蔵野へ空を戻してどんど果つ
調布市　浅野　文男

正木ゆう子 選

春寒し餃子の皮の持ち心地
東京都　大岩　真理

【評】ひんやりと柔らかい皮を掌に載せた感触。真ん中に具を置いて、次々と包む無心の時間。作り慣れていれば誰もが経験している、こんなことまで俳句に出来たら楽しい。

ノンポリてふ昭和の死語よ三冬尽く
上野原市　宮野　始

【評】ノンポリティカルの略。政治運動に加担しない学生をそう呼んだのは昭和43年頃。当時の若者も皆老いた。下五がしみじみと上手い。

辞めるなと言われてうれし冬の朝
つくば市　小林　浦波

【評】率直で素朴な佳句。それだけでなく、何を辞めるのかを想像すると、人により様々な事柄が浮かびそう。解釈は読み手の人生を反映する。

あちの窯枯野挟みてこちの窯
相模原市　芝岡　友衛

天上へ妻を還して豆を撒く
高砂市　池田喜代持

しづけさに出で粉雪でありにけり
東京都　望月　清彦

このふきのとうじゃないってまだある
館林市　松本みゆき

く
子の匂ひあるお下がりの防寒着
吹田市　堀田恵美子

朝刊を小脇に仰ぐ冬の星
藤沢市　一色　伽文

うぶすなは遠州の在根深汁
浜松市　久野　茂樹

小澤 實 選

風邪の子の窓に額を押し付けぬ
習志野市　神鳥　文子

【評】風邪をひいた子どもが、窓に自分の額を押し付けている、というのだ。外気に冷えたガラス窓で、発熱した額を冷やそうとしているのか。あるいは回想句か。

雪の湯を出るに出られぬ猿おらむ
船橋市　花沢冨美雄

【評】雪国の温泉に気持ちよくつかっている猿を見て、寒さで出るに出られなくなっているものもいるかも、と想像。湯あたりしそうだ。

宙へ飛びけるスキーヤー瘤に跳ね
大津市　星野　暁

【評】スキーといっても順調に滑っているわけではない。地面の瘤に跳ね上がって、宙へと飛び出しているというのだ。かなりスリリング。

野焼果て双体道祖神の夜
高槻市　村松　譲

ぎうぎうとしぼり上げたるはうれん草
横浜市　長山　香織

顔入れて河馬の歯磨く春隣
神戸市　山口　誠

滝壺を凍らせて寒戻りけり
津　市　渡辺　健治

凍てつきし太宰の墓前去りがたし
横浜市　田中　清春

魂は空のかなたや日向ぼこ
日立市　菊池　風峰

光雅の椅子の革擦れ水温む
京田辺市　加藤　草児

短歌あれこれ　江戸雪（歌人）

助けるということ

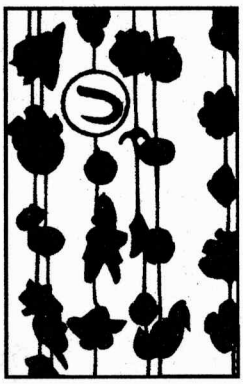
父が亡くなり、母は認知症が悪化、介助が必要となった。

介護をしていて最もしんどかったのは、怒りの感情を抱いてしまうとき。食事を出しても食べなかったり、用意した服を着たがらなかったりすると、「こんなに苦労して助けているのに」と、言うことを聞いてくれないことに腹が立ってしまう。

しかし、どんなに老いても母は一人の独立した人間だ。意志を持って行動しようとしていることに腹を立ててはいけない。でも…。誰かを助けるということの裏には、人間の傲慢さが隠れているときがある。私がもてあましていた、愛情と傲慢の間にあったものは、いまこんなうたとなって残っている。

＜カーテンは下にむかってやさしさを垂らしてそれがときに傲慢　江戸雪＞

今は週に一度、施設へ母に会いに行く生活になった。帰りの車中で湧きあがる感情を、いつか詠えたらとおもう。



題字デザイン・イラスト　福田美蘭